

〈研究ノート〉

## 紀伊半島における河川プールの設置状況

田代 優秋

### 1. はじめに

近年、人々による川の使い方が多様化している。これまで河川敷地内では、治水や利水面から積極的な利用は制限されてきた。また、都市部などの河川では水質悪化、生物の減少、直立護岸などによって利用しにくい空間となっていた。しかしながら、環境再生が進んだことも影響して、近年、河川管理者の規制緩和による河川空間のオープン化が進められ、官民一体となった水辺に賑わいを再生させる活動が展開されている。例えば、先行事例として広島市京橋川や東京都隅田川のオープンカフェなどがあげられよう(杉恵2013、藤本ら2011、平林2013、細田ら2013)。このように、都市部の水辺を中心として“人と川の新たななかかわり”が模索されつつある。

これまで、こうした人と川をつむぐ利用がなかったわけではない。あまり注目されていなかったが、川には泳ぐことを目的としたプールが設置されることがある。この名称は多様で河川プール、自然プール、天然プール、あるいは水泳場や遊泳場などと呼ばれている。本論ではひとまずこれらを総称として「河川プール」としたい。そもそも、川では人々が自由に泳ぐことが可能であり、河川法でも「自由使用」として認められている。にもかかわらず、あえて川の中にプールが設置されてきた。その設置数は前述のオープンカフェよりも多く、日本全国約130箇所ある(田代ら2013、田代2014)。これら河川プールの多くが1970年代後半～1990年代に造られ、当時の利用状況は他の河川親水施設よりも利用者が多かった(島谷2009)。また、それは現在でも続き、例えば大分市にある河原内川河川プールには地域内外の住民が夏季7～8月の2ヶ月間に約2万人も訪れている(大分市2014)。

それでは、河川数も多く、河川の水量も豊富な紀伊半島に目を向けてみる。

紀伊半島では、河川プールに関する調査研究はもとより、そうした設置情報や利用実績すら全く整理されていない。そこで本研究では、紀伊半島における人々の河川での親水活動をみるひとつの資料として、河川プールの基礎情報にあたる設置状況を調査した。この中で、設置の経緯などの過去資料が得られたいくつかの河川プールについて詳述した。

## 2. 河川プールの定義

本論における河川プールをはじめに定義しておきたい。まず、一般的にプールとは「水泳を行う目的で設けられた人工的な水泳場のこと」(小学館日本大百科全書)、「人工的に水をためた遊泳場、水泳場」(デジタル大辞泉)、「水泳や水遊びなどをするために設けた水槽」(大辞林第三版)、「人工の水泳場」(金園社国語辞典)などとされている。つまり、泳ぐことを目的に水を溜めた人工的な構造物といえる。次に、河川プールの定義としては、島谷(2009)が「河川の一部を仕切りプールとしたもの、あるいは河川の高水敷上に設けられたプールの総称」としている。しかしながら、この定義では、例えば、水源に水道水を用いて河川敷に造られた市民プールや、親水施設として設置される水深数十cm程度の水路や池(いわゆる、せせらぎ水路、じゃぶじゃぶ池、噴水池など)も含まれ、やや曖昧である。河川プールと類似の親水施設の違いを考慮すると、直接的に「水に触れる」「手足をつける」といった軽度な接触ではなく、「泳ぐ」という全身での接触を伴う。また、水源が水道水や地下水などではなく、河川水を利用していることといえよう。したがって、本論で取り扱う河川プールは「堤外地において河川水を利用し一定以上の水深を確保して、遊泳を目的に設置された施設で、その目的と範囲が利用者に明示されているもの」と定義した。ここで目的と範囲の明示を加えた理由は、構造物の設置を伴わない河川プールの場合、河川の自由利用の範疇で泳いでいることと同義となるためである。

## 3. 河川プールに関する調査

紀伊半島における河川プールに関するまとまった調査は、管見の限りなされていない。そこで調査は、現存するものだけでなく過去に存在したものも

含めることとした。調査は次の2つから構成され、すなわち過去から現在に至る河川プールを探索する「分布調査」と、その設置経緯を過去資料から読み解く「詳細調査」である。また、これらの調査範囲は紀伊半島とし、三重県、奈良県、和歌山県の3県を扱った。なお、大阪府と三重県に存在するが、紀伊半島に含まれないため省略した河川プールとして、三重県桑名市多度町を流れる多度川に設置されている「多度峡天然プール」(現存施設)、大阪府の茨木中学校(現 茨木高校)に設置された河川水を引き込んだ「水泳用プール」(1913年設置、現在は撤去(大阪府立茨木高等学校校史編纂委員会1995))、および大阪府三島郡清溪村(現 茨木市)の清溪小学校に飛び込み台も附設された競泳用の「清溪小学校プール」(1925年設置、現在は撤去(清溪小学校創立115周年記念事業実行委員会編著1988))があった。

### (1) 分布調査

河川プールの分布を把握するために、あらゆる情報媒体(雑誌、書籍、論文、インターネットなど)を使い、情報収集に努めた。また、情報媒体には記載されず、地域住民のみに知られるような河川プールも把握するため、情報投稿を呼びかける特設Webサイト(<http://pool.pjm.jp/>)を設置した。さらに、現地確認に訪れた際に河川プールの設置者や地域住民から、その他の分布情報についても聞き取った。なお、情報収集の期間は2012年8月～2016年8月までの4年間で随時行い、現地確認は2016年5月から8月に行った。

### (2) 詳細調査

得られた分布情報から現地確認を行ったところ24箇所が確認された。このうち3箇所、すなわち前畑記念プール(和歌山県橋本市)、高田第1自然プール、および高田第2自然プール(ともに和歌山県新宮市)について設置の経緯、利用状況などが把握できた。この際に、可能な限り複数人の地域住民に聞き取りを行い、行政機関や近隣の資料館などで一次資料を確認し、正確性の向上に努めた。

## 4. 分布調査の結果

### (1) 紀伊半島での河川プールの分布

本調査から紀伊半島では、三重県 1 箇所、奈良県 2 箇所、和歌山県 21 箇所の計 24 箇所が確認できた(2016 年 8 月時点)。これらの中には、現存し使用されている施設以外のものも含まれている。それらは表 1 のように整理された。すなわち、現存し利用されているものが 20 箇所、現存するが近隣の子どもの減少によって残念ながら未利用のものが 2 箇所(和歌山県赤木川の指定型)、利用状況が不明なものが 1 箇所(奈良県高見川の指定型)、撤去されたものが 1 箇所(和歌山県橋本川の引込型)あった。また、現存はするが、本報告では非公開と判断したものが 16 箇所あった。その理由としては、河川プール近辺に案内看板等が設置されていても、当該市町村のホームページや行政機関等が発行する公式な観光パンフレットなど対外的な媒体に公表されていないものは地域固有の資源と考え、ここでは名称や特定につながる詳細な位置の公表については控えたい。加えて、公開することで地域外住民の不特定多数が来訪するなど安全管理上の理由から河川管理者あるいは設置者が公開を望まないものもあったためである。

設置数をみると 3 県の中で和歌山県が特に多い。日本全国で河川プールが

表 1 紀伊半島で確認された河川プール。このうち 16 箇所については公開することによる設置地域への影響を考慮して現時点では非公開と判断した。

都道府県	水系	河川名	タイプ	名称	所在地	箇所数
奈良県	紀の川水系	紀の川	指定型	上市水泳場	奈良県吉野郡吉野町上市	1
		高見川	指定型	非公開	非公開	1
和歌山県	紀の川水系	橋本川	引込型	前畑記念プール	和歌山県橋本市古佐田	1
		日高川水系	猪谷川	掘込型	猪谷川水辺公園自然プール	和歌山県日高郡日高川町初湯川
	富田川水系	高瀬川	堰止型	非公開	非公開	1
	古座川水系	小川	指定型	明神小学校水泳場	和歌山県東牟婁郡古座川町直見	1
			指定型	非公開	非公開	2
	新宮川水系	古座川	指定型	月野瀬少女峰	和歌山県東牟婁郡古座川町月野瀬	1
			指定型	非公開	非公開	3
		高田川	指定型	高田第1自然プール	和歌山県新宮市相賀	1
		里高田川	堰止型	高田第2自然プール	和歌山県新宮市高田	1
		赤木川	堰止型	非公開	非公開	1
			指定型	非公開	非公開	6
	四村川	指定型	非公開	非公開	1	
		三越川	造成型	非公開	非公開	1
	三重県	新宮川水系	相野谷川	堰止型	大里自然プール	三重県南牟婁郡紀宝町大里

最も多い都道府県は山口県で35箇所(うち26箇所は土砂の堆積などで未利用)、次が大分県で27箇所あり、和歌山県は全国3位の設置数といえる。ただし、紀伊半島の河川プール設置数は現時点での結果であり、今後、調査が進めば多くの河川プールが見つかる可能性が高い。実際に、地域住民への聞き取り調査時に「昔、自分で造って遊んだ」との情報も得られている(本報告では詳細な位置が未確認であったこと、存在を示す写真や複数人からの証言などが得られなかったため除外した)。こうした個人や集落単位で造られたものについては、今後の調査に期待したい。

## (2)河川プールの構造からみたタイプ分け

河川プールはいくつかのタイプに分類される。このタイプ分けは、河川敷地内の位置と堰の有無によって区分できる。低水路内に設置されるもののうちで、1)堰止型：堰によって湛水区域を設ける、2)掘込型：堰を設けずに河床を掘削し水深を大きくしたもの、3)併設型：流下方向に平行に隔離壁を設けたもの、4)指定型：ロープや看板などを設置するのみで構造物を持たないものがある。また、高水敷に設置されるものには、5)引込型：設置位置よりも上流で堰き止めて河川水を導水するものがある。紀伊半島では、これらのうち「指定型」が最も多く17箇所、「堰止型」が4箇所、「掘込型」が1箇所、「引込型」が1箇所、確認された。さらに、これまでの分類タイプにはなかった河床材料(巨石や礫・砂利など)を積み上げ、河川を一時的に堰き止めて湛水区間を造る新しいタイプ「造成型」が1箇所確認された。

タイプ別にみた場合、紀伊半島には構造物を伴わない「指定型」が突出して多い。例えば、日本全国で河川プールが最も多い山口県や大分県では構造物を伴う「堰止型」や「引込型」がほとんどである。和歌山県の「指定型」の河川プールは、山間部において子どもの遊び場にと流れの緩やかな川の深みを小学校や集落などが水泳場として指定したものであった。しかし、そもそもこうした「指定型」の河川プールは比較的流程が緩やかではあるが、川そのものであるため、安全管理上の理由から積極的に公表されることは少ない。このため、今後、他の都道府県の山間部でも詳細な聞き取り調査によって新たに発見される可能性がある。実際、京都府南丹市美山町の由良川では、

狭い範囲に集中的に6箇所の「指定型」の河川プールが確認されている(特設Webサイト参照、<http://pool.pjm.jp/>)。したがって、本調査の結果だけで和歌山県の「指定型」の多寡を判断できなかった。

### (3)新たにみられた「造成型」の河川プール

新たに確認された「造成型」は、過去に日本全国にあったことがしばしば聞かれる。記録に残るものとして、1980年代に東京都西多摩郡五日市町中養谷地区(現 あきる野市)では山間部で子どもの遊び場がなく、地区の父母が総出で丸太を横木にしてトタン板で水を堰き止めた即席プールを造っていた(朝日新聞1986)。これは“田舎だけにみられる夏の風物詩”という類のものではなく、都市近郊でも存在していた。埼玉県飯能市の名栗川では市役所がブルドーザーで川原にプールを造ったり(読売新聞1970)、東京都西多摩郡羽村町(現 羽村市)の多摩川では浅瀬を掘り下げた自然プールが造られていた(朝日新聞1967)。こうした川のダイナミックな利用といえる「造成型」の河川プールは治水面・環境面・漁業面・安全面・法律面などから社会的合意が得られにくく、現在ではほとんど造られないだろう。著者らによる近年の唯一の調査でも確認されていない(田代ら2013、田代2014)。したがって、現存



図1 新宮川水系三越川で確認された造成型河川プール(2016年8月26日撮影、撮影地点は非公開)。写真中央部、川の流れを堰き止めるように川砂利が積まれている。河川の右側で一部崩れているのは、数日前の増水の影響で流された。造り方は小型のショベルカーで川砂利を積み上げる単純なもの(地域住民(58歳)への聞き取り)。

する「造成型」の河川プールは、新宮川水系三越川で見つかったものが日本唯一と考えられる(図1)。「造成型」にみられるような地域社会に固有の人と川の接し方は、現代においてほとんどが消失しており、文化的価値すらあろう。この「造成型」の河川プールは残されるべきものとして、あえてここで記しておきたい。

## 5. 詳細調査の結果

紀伊半島で確認された24箇所のうち、設置の経緯や利用状況などの詳細な資料や記録が得られ、設置経緯が読み解けた前畑記念プール(和歌山県橋本市)、高田第1自然プールおよび第2自然プール(ともに和歌山県新宮市)の3箇所について述べる。

### (1) 前畑記念プール(和歌山県橋本市)

この河川プールは1938年8月11日(昭和13年)に橋本市に造られたが、1960年頃に撤去されている。建設の経緯については、1936年8月11日(昭和11年)のベルリン・オリンピックの水泳競技200m平泳ぎで金メダルを獲得した故兵頭秀子選手(旧姓 前畑)の偉業を讃えて出身地である和歌山県橋本町(現 橋本市)に建設された(大正新聞1938、永島1975)。これは同年8月12日の新聞紙上で次のように紹介されている(読売新聞1936)。

「橋本町では前畑嬢の晴れの成績を郷土の誇りとして永久に傳へるため字佐美町長はじめ町會有力者が協議の結果前畑嬢を育んだ紀ノ川の河水を利用して五十メートルの大プールを建設し『前畑プール』と名づけ第二世第三世前畑の大量生産をしようという計画を立て前畑嬢の平泳優勝の快報を待つて町會に付議する筈である(原文ママ)」(傍点は著者による。以下、同様)

そして、2年後の1938年8月11日に紀の川支流の橋本川左岸に長さ25m、全7コースの「前畑・小島記念プール」が造られた(大正新聞1938、橋本新聞2012)。なお、施設名称は文献によって橋本プール、記念プール、前畑・小島



記念プールとあり統一されていなかったため、本論では「前畑記念プール」を用いる。

前畑記念プールが、当時どのような位置づけだったかについて当時の資料から考えてみたい。前畑記念プールの当時の写真や設計図面は橋本市郷土資料館に保管されている。これらの資料から、なぜ川にプールが設置されたのかを直接的に示す資料などは見当たらなかった。プールに用いる水源は本来であれば衛生的な上水道が利用されるが、橋本町における水道事業は1952年(昭和27年)に創設されており、当時はまだ存在していない(橋本市2009)。このためプールの水源は、河川プールの設置位置が橋本川堤外地の高水敷にあること、橋本川の上流側に固定堰があること、図2に導水路が見えることを総合すると、水源を河川水に求め、堰で分流させ直接引き込んでいたものと考えられた。これは、宇佐美町長が当初から前畑記念プールの水源を河川水と言及している点とも合致している。

次に、前畑記念プールの構造については一般的な小学校25mプールとほぼ同じであった。またプール併設施設には階段上の来賓席、トイレ、更衣室があり、水泳競技や選手育成のために造られたことが伺える。

また、前畑記念プールに対して、宇佐美町長は前述の新聞紙面上で次のようにも語っている。

「あの子は水泳ぎは上手でしたがこんなにならうとは思ひませんでした、しかしあの子を産んだのは『わしが國さ』の紀ノ川なんです、それで町としても前畑秀子嬢を永久に自慢する紀ノ川を讃へるためプールの建設を考へたのですが私の少ない財産を全部注ぎ込んでも是非實現させる決心です(原文ママ)」(読売新聞1936)

前畑記念プールの当時の利用者には、この地区在住の故古川勝選手が頻繁に使用していた。古川選手も約20年後の1956年メルボルン・オリンピックの水泳競技200m平泳ぎで金メダルをとった功績がある。このように水泳の練習用として利用されていたが、前畑記念プールは施設の老朽化、河川水の水質悪化、周辺小学校でのプール整備、市民プールの建設が進んだことから、1960



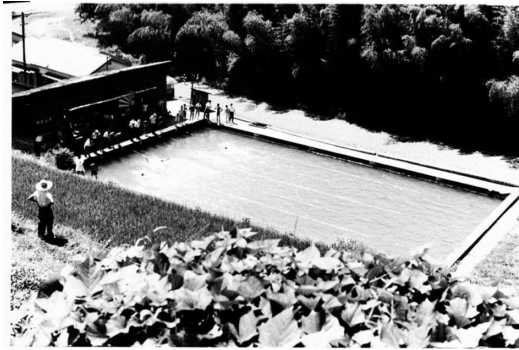


図2 橋本川の洪水敷に設置された前畑記念プールの様子(撮影年代不詳、橋本市郷土資料館提供)。1947年9月27日撮影の空中写真で位置を確認することができた(写真番号：USA-R510-1-63)。

年頃(昭和35年頃)に撤去されたとのことである(橋本新聞2012)。

これらのことから、前畑記念プールは子どもの遊び場や河川に設けられた親水施設というよりも、地域資源であった紀の川をシンボルとした地区限定の競泳目的のメモリアル的施設と捉えるべきであろう。

## (2)高田第1自然プール、第2自然プール(ともに和歌山県新宮市)

高田第1自然プールと高田第2自然プールは、それぞれの設置工事に関する行政書類や市の広報誌が所管課(新宮市教育委員会生涯学習課)に保管されており、詳細な設置経緯を知ることができた。高田第1自然プールは1978年6月(昭和53年)に、高田第2自然プールは4年後の1982年6月(昭和57年)に設置されている(図3、4)。高田第1自然プールの利用状況を受けて高田第2自然プールが設置されていたことから、以下では両者を一体的に論じたい。

まず、設置年代の早い高田第1自然プールについて述べたい。新宮市では、設置前年度の1977年度に市の長期総合計画にもとづく三カ年(1978～1980年度)の実施計画が策定された(新宮市1978a)。この重点施策として「希望とやるおいに満ちた新しいふるさとプラン」として「心のふれあう文化とスポーツのまちづくりのために、郷土資料館、市民体育館、自然プールの建設」と市民向けの広報誌に示されている(新宮市1978b)。また、同時期に作成された



a) 設置された1978年当時の高田第1自然プール



b) 2016年の高田第1自然プールの様子(2016年8月撮影)

図3 高田第1自然プールの設置当時と現在の様子。1978年には吊橋が掛けられていたが、現在はない。b)は湾曲部に形成された砂州を芝生広場から撮影したもので、a)でパラソルが見える付近に相当する。



a) 設置された1982年当時の高田第2自然プール



b) 2016年の高田第2自然プールの様子(2016年8月撮影)

図4 高田第2自然プールの設置当時と現在の様子。河川プールは写真左下の堰による湛水区間。1982年の設置当初は、対岸にコンクリート護岸がなくなだらかに川べりにつながるが、現在は護岸化され階段が敷設されている。

行政書類として、高田第1自然プール設置の事業認定(土地収用法 第16条の規定)を受けるために新宮市から和歌山県に対して提出された「事業認定申請書」があった(1978年2月20日、新教社第60号)。この中で河川プールを設置するに至った経緯や目的が示されていた。同資料内の別添第1号事業計画書に「事業の施行を必要とする公益上の理由」として次のようにある。

「今回の事業は青少年の健全育成と広く一般市民の余暇利用並びに社会教育の場として、市民の健全な体力づくりを目指す為のレクリエーション広場とし、多くの市民が利用する施設として新設するもの」

さらに、同資料には地域が抱える切実な社会課題が背景にあることも示されている。

「住宅難や土地の値上りにより、野山が宅地造成化され住宅が立ち並ぶなかで自然の遊び場を奪われた青少年達は、人目のない場所を求めて集まり、喫煙をおぼえシンナー遊びなど非行が続出し、(略)青少年の非行が一番多い夏場にこのレクリエーション広場を建設し、(略)高田川の自然の水域を利用して遊泳もでき、またこの広場を活用してキャンプ等青少年にレクリエーションの場を与えることにより非行防止に役立てようとするものであります」

これらのことから、高田第1自然プールは青少年の健全な遊び場の不足と非行防止を社会背景として、青少年の健全な育成が第一の目的であり、合わせて一般市民にも広く使ってもらえるレクリエーションの場であったことがうかがえた。

高田第1自然プールの当時の利用状況についても資料を確認できた。開設初年度は、連日、子どもや家族づれなどで賑わっており、特に土日には車の渋滞がひどいため、7月21日～8月31日まで臨時バスを3便運行するほどであった(新宮市1978c)。また、各年の開設期間中(7/1～8/31、ただし1994年度から7/14～、2001年度から7/15～に変更)の利用者数の統計も取られてお

り、「新宮市の教育 教育要覧」（新宮市教育委員会1978～2015）によると、開設初年度から1990年代前半までは毎年約2万人以上の来訪があった（図5）。これは当時の人口が38,000人～39,000人であったことを考えると、人気の施設だったといえる。

こうした活況の中で、なぜ、2つめの高田第2自然プールが造られたのだろうか。1979年8月（昭和54年）、新宮市を含めた隣接する7町1村が第三次全国総合開発計画に基づく定住圏構想を推進するため全国44地域のひとつとしてモデル定住圏に指定された（新宮市1979）。これは、住民参加を基本としながら地方都市と周辺地域を一体化して生活基盤整備を進めることで、住みやすい地域づくりが目的の事業であり、地方振興を図り、都市部への人口流出を止めて、地域間の所得格差を解消することが最終目標とされるものである。具体的には、2つある基本方針のひとつとして「熊野の歴史と伝統と文化に根ざした特色ある保養、レクリエーションゾーンを整備し、青少年も老人も共に憩える圏域をつくる」を掲げ（新宮市1980a）、産業経済中心から文化中心、物から心へ、人工から自然へと人心の変化が起こっているとして、自然と触れ合えるレクリエーション施設が目指された（1980b）。そして、1981年

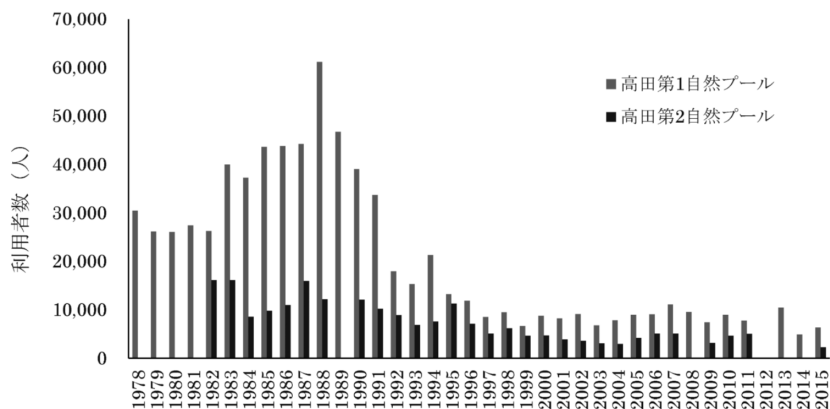


図5 高田第1、第2自然プールの利用実績。高田第2自然プールは1982年に開設されており、1989年と2008年の利用者数は記載がなかった。2012年は前年の紀伊半島豪雨災害によって被災し、利用休止されていた。その後、高田第1自然プールは2013年度から、高田第2自然プールは2015年8月1日から再開されている。

に初めて高田第2自然プールの整備が示された(新宮市1981)。ここでも工事に関する行政書類が保管されており、これらを紐解くと「仮設道路設置許可(1982年1月22日(昭和57年))」にある事業計画書の中には以下のようにある。

「高田第2自然プール建設事業は、国土庁モデル定住圏計画事業で定住圏計画の主旨である『地域の特色を生かし、住民が定住しうる環境整備』の一事業として建設するものであり、自然の中で子供や家族が共に楽しく安心して憩え、健康づくりの増進と青少年の健全育成を目的とするもの」

また、「国有財産(里道、水路、敷地)の使用許可申請(1982年1月20日(昭和57年))」の事業計画書には次のように記載されている。

「本市には、現在相賀地区に自然プールを開設しておりますが、環境の良さと清流と溪谷の美しさの中での開放感が満喫できることで、開設以来毎年利用者が急増しており、現在の施設だけでは、さばききれない状況になってきております。又、昭和54年には、当圏域がモデル定住圏域に指定され、今後はこの計画に合せ高田地区が整備されることにより、定住人口と合せ高田地区を訪れる人々が殖えることと予想され、特に夏期には、利用者が多く、子供や家族が楽しく、安心して憩いの場、健康づくりの場として利用できる施設をつくる(原文ママ)」(相賀地区の自然プールは、高田第1自然プールを指す)

つまり、高田第2自然プールは、先行して設置された第1自然プールとはほぼ同様の目的、青少年の健全な育成とレクリエーションの場として位置づけられている。これに加えて、第1自然プールの活況を受けて、地域外から高田地域に訪れる交流人口の増加を想定して設けられている。したがって、2つの高田自然プールは地域住民のためだけでなく、地域外にも開かれた施設としての意味合いが付与されたと考えられる。

## 6. おわりに

紀伊半島には、全国的にみても多くの河川プールが確認された。その内容も特徴的で、かつて日本各所にみられたが現在ではなくなった造成型河川プールの存在や、小学校が指定する水泳場など他地域にはない河川プールがみられた。これら以外にも設置の経緯が把握できず本論文では触れなかったが、例えば、三重県紀宝町の相野谷川に設置されている「大里自然プール」は高田第1自然プールよりも古くからあり、今でも年間約2万人もの地域内外の住民によって利用されている。また、和歌山県日高川町の「猪谷川水辺公園自然プール」は小さな掘込型プールがいくつも連なり他所ではみられない特徴的な構造をしているとともに、利用者が隣接する温泉施設やキャンプ場を利用しており地域にとって相乗効果ももたらしめている。

こうした人と川とのかかわりが紀伊半島ではいくつかみられた。聞き取り調査で訪問した古座川町立の小学校では、今でも水泳授業の一部を川で行っていた。ここでは「川は危険なもので近づかない」という指導ではなく、「危険だからこそそれを学び、自分の命は自分で守る」と指導している。こうした取り組みは、教育や安全管理を単に児童や学校だけに任せることなく、保護者や地域社会が一体となって行われていた。こうした川との接し方は、全国的にも先進的で、学ぶところが大きい。こうした取り組みが今後も継続されることが望まれる。

一方で、もちろん、川は危険な場所である。全国の水難事故マップ2003-2015によると13年間に川での水難事故は全国2,287件発生している。無知がゆえの危険な行為(中州でのキャンプ、高所からの飛び込みなど)は除外しても、残念ながら児童の溺死は後を絶たない。しかし、そもそも河川は危険であるから利用しない、させないとする社会のあり方や考え方はよいだろうか。本調査でみられたように、地域全体で川を大切な資源(ここでは教育資源や観光資源)として捉え、河川プールといった利用できる方法を模索し、子どもらに川での遊び方、接し方を地域全体で教えるべきではないだろうか。施設設置者や河川管理者に対して管理責任を過度に問うよりも、リスクと上手に付き合うやり方がよりよい社会のあり方と感じてならない。

## 謝辞

本調査にあたり、古座川町教育委員会、新宮市教育委員会生涯学習課、紀宝町教育委員会、美山温泉療養館、新宮市下田隣保館の荒木氏、紀宝町在住の山城氏、ふるさと定住支援センターの河口氏、大里自然プールの監視人の田中氏・榎本氏、日本河川・流域再生ネットワークの和田氏、その他聞き取り調査に快く応じてくれた地域住民の方々には多大なる感謝を申し上げます。本研究の一部は、基盤研究(A)「不確実性と多面的価値の中での順応的な環境ガバナンスのあり方についての社会学的研究」(研究代表：宮内泰介、研究課題：16H02039)、基盤研究(B)「包括的地域再生に向けた順応的ガバナンスの社会的評価モデルの開発」(研究代表：菊地直樹、研究課題：15H03425)の助成を受けたものです。

## 引用文献

- 朝日新聞(1967)“自然プール”にぎわう 多摩川、7月24日朝刊16面。
- 朝日新聞(1986)川プール泳ぐ自然手づかみ、8月5日朝刊20面。
- 大分市(2014)平成26年度利用者状況、大分市ホームページ <http://www.city.oita.oita.jp/www/contents/1117155004310/>。
- 大阪府立茨木高等学校校史編纂委員会(1995)プールと水泳、茨木高校百年史、創立百周年記念事業実行委員会、大阪、p.334-372。
- 清溪小学校創立115周年記念事業実行委員会編著(1988)清溪：茨木市立清溪小学校創立115周年記念誌(原著当たれず)。
- 島谷幸宏(2009)河川プール、高橋裕、岩屋隆夫、沖大幹、島谷幸宏、玉井信行、野々村邦夫、藤芳素生編著、川の百科事典、丸善株式会社、p.238。
- 新宮市(1978a)広報しんぐうNo.101(昭和53年3月)2面、新宮市史史料編さん委員会(昭和58年)復刻版広報しんぐうNo.2(昭和52年5月～昭和58年3月)。
- 新宮市(1978b)広報しんぐうNo.104(昭和53年6月)1面、新宮市史史料編さん委員会(昭和58年)復刻版広報しんぐうNo.2(昭和52年5月～昭和58年3月)。
- 新宮市(1978c)広報しんぐうNo.106(昭和53年8月)3面、新宮市史史料編さん委員会(昭和58年)復刻版広報しんぐうNo.2(昭和52年5月～昭和58年3月)。
- 新宮市(1979)広報しんぐうNo.119(昭和54年9月)2面、新宮市史史料編さん委員会(昭



和58年)復刻版広報しんぐうNo. 2 (昭和52年 5 月～昭和58年 3 月)。

新宮市(1980 a)広報しんぐうNo.132(昭和55年10月) 2 面、新宮市史史料編さん委員会  
(昭和58年)復刻版広報しんぐうNo. 2 (昭和52年 5 月～昭和58年 3 月)。

新宮市(1980 b)広報しんぐうNo.132(昭和55年10月) 2 面、新宮市史史料編さん委員会  
(昭和58年)復刻版広報しんぐうNo. 2 (昭和52年 5 月～昭和58年 3 月)。

新宮市(1981)広報しんぐうNo.137(昭和56年 3 月) 2 面、新宮市史史料編さん委員会(昭和58年)復刻版広報しんぐうNo. 2 (昭和52年 5 月～昭和58年 3 月))。

杉恵頼寧(2013)河川空間を活用した広島市のまちづくり：民間事業者による常設オープン  
カフェ、区画整理56(4)：20-24。

大正新聞(1938)水に喚ぶ気概と歓喜 おお感激また新た 橋本のプール開き、8 月14日 1 面。

田代優秋・乾 隆帝・松田春菜(2013)川の中にあるプール：大分県の河川プールの分布調査、  
日本湿地学会誌 3 (1)：61-64。

田代優秋(2014)川の中にプールを作った地域－河川プールがつむぐ人と川－、ワイルドライ  
フ・フォーラム19(1)：23-25。

永島福太郎(1975)兵頭秀子、橋本市史下巻(橋本市史編さん委員会編集)、p.862-863。

橋本市(2009)橋本市水道ビジョン～住んでよし 豊かな自然 水もよし～、橋本市上下水道  
部、p. 5-21。橋本市 ホーム ページ<<http://www.chw.jp/guide/jogesuidobu/suidogyomu/jigyounaiyou/1360040386520.html>>。

橋本新聞(2012)2012年 7 月 5 日、五輪金・前畑さんの「謝辞」…資料館へ寄贈保存、<  
<http://hashimoto-news.com/news/2012/07/05/12366/>>。

平林正明(2013)隅田川河川区域のオープンカフェ：河川敷地占用許可準則に基づく常設施設、  
新都市67(4)：25-28。

藤本和男・嘉名光市・赤崎弘平(2011)公共空間を利用した外部地先利用空間の利用実態と評  
価に関する研究－広島市京橋川のケーススタディ、－都市計画論文集46(1)：63-68。

細田 渉・澤野 朋・志村秀明(2013)日本建築学会技術報告集19(41)：303-308。

読売新聞(1936)勝てよ、水の女王 前畑嬢、郷里の熱狂 紀ノ川の水でプールまで作る、8  
月12日夕刊 2 面。

読売新聞(1970)川もいっぱい、8 月17日夕刊 3 面。